

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2026. 4



令和8年4月1日発行(毎月1回1日発行)第74巻第4号

No.815

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してきた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二六年 四月号 (通卷八一五号)

◇今月の二十首詠……夢の浮橋 坂上直美 2

■作品 **A** 磯田ひさ子・市原やよひ他 4

A 菅田房子他 18

B 今井敏博他 44

C 安藤清子他 54

A 杉浦詩子他 66

■オリーフ集 木村恵子・許田邦子他 34

◇今月の二人 遠藤弘子・日笠純子 14

私と短歌との出会い (284) 三浦美代子 17

私の内部に巨口のやうな 香川進の口語自由律 13

■茨淑子歌集「仮面供養」について 三好聖三 28

■〈第一歌集を読む〉37 久我田鶴子歌集「転生前夜」 40

——静かに燃えて—— 西堤啓子

■歌壇月旦 西堤啓子 33

短歌と神々歌会始

■遊覧寄港〈短歌絶叫コンサートへ行く〉 仲西正子 42

■二月号作品批評 58

A……上林節江・大寺智子

河上悦子・島根美智子

B……中村博子・八田曉美

C……河野繁子

オリーフ集……三好聖三

十首選 土井谷恭子・佐藤 昌 43

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

靖子のへなちよこ指南 滝田靖子 76

最近の歌誌より [編集部・高尾] 77

第72回地中海全国大会(東京大会)のご案内 78

クリップ……76 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## 夢の浮橋

坂上 直美

君去りて五年六年はやも過ぐ夢の浮橋いつか渡らん

君渡り遠ざかりゆく雲の涯いつか渡らん夢の浮橋

汝が魂は空の彼方に在します朝夕に窓に凭るる

今さらに誰に伝えん彼の人のわれに対して優しかりしを

愛し子は一匹の猫二人して迎えてやがて二人葬りき

真珠婚間近に君は世を去りぬ短かりしよ我にとりては

ある友は夫を介護す二十年羨まざるか羨むべきか

あるときはありのすさびに君を恋いなくてぞ君のなおも恋しき

一九五一年生まれ  
天平グループ長  
歌集に「Ich」がある  
蟹座 AB型

夏の夜の短き夢に現れてはかなく消ゆる汝が面影

山の中君の姿を追い続け見失いたる夢を見てけり

悲しみは胸底深く秘するもの辛くも人に語るべからず

歌とうは悲しみの器我もまた君を失いただ歌うたう

悲しみの沼に沈むはたやすけれ溺るな直美もがきて出でよ

見渡せばこの部屋に君の気配あり遺影ほほ笑む「直さん元気？」

「もし僕が先に死んでも変わらずに本を読んでね酒を飲んでね」

本棚に君の遺せる数多の書「えい／＼」と一冊読むを試む

万葉古義読み上げたりと亡<sup>お</sup>君に告ぐ理解せりとは告げざりしかど

結婚の記念に二人購いし折口信夫ひとり読み継ぐ

亡き夫は「明るく笑う君が好き」空に向かいて我が笑みを投ぐ

いつの日か君が御許にゆくならん雲の涯<sup>はた</sup>の夢の浮橋

# 作品 A

磯田ひさ子

水仙

・森

わが病めばひもじき思ひするならむ植木 小雀 仏前の花  
 災ひは先祖が守つてくれるとふ身の辛ければ心底縫る  
 東京に降る初雪を外に出でて手のひらふたつ揃へて受ける  
 やうやくに咲ける蠟梅を補ひて椿つきつきくねなる氣負ふ  
 たまもの景色あらはるくねなるの椿にしろき雪降り積もる  
 雪 水仙 白飯 料紙 淨きものかたはらにある幸を数へて  
 願はくはわが旅立ちに水仙の一本胸に添はせて欲しく

市原やよひ

白き月

・萬

暮せまる大寒の空の白き月散歩の我に寄り添うように  
 蠟梅のつやめき今年も公園のいつもの場所にありて安堵す  
 立春のやわき光は庭に満ち罪ある如く雪の地思えり  
 大雪のニューステレビを占めゆきて選挙カーもその中にあり  
 自然には人は勝てぬと見せつけて豪雪は人の営み奪う  
 こんなにも違いがあるのか日本を二分しており青空と雪と  
 青空はタムの底見せ豪雪は人住む家を潰していたり

梅本武義

わが里

・羊

雪雲におおわれ風荒れ白くなるわが里山陽少し興奮  
 五個の柚子浮く熱き湯にゆっくりと身を沈め聞く山の騒ぐを  
 冬の川よどみ澄み切り川蟻の数多散らばる螢飛ぶ里  
 菓子好きの妻と孫とがまた食べる一つだけはと糖尿のわれ  
 東の間の四十年と孫に見ず在位記念の金貨と銀貨  
 昨年ここで語りし友逝きわれも癌木々の芽白く日差しを返す  
 歳重ね親しくなりて遠き日の面影思う声は変わらさず

大浪美雪

粉雪

・森

街灯の光の中をうれしやな粉雪しげく舞ひ乱れをり  
 昨夜の雪瓦に薄く打ち敷きて正月三日の趣をなす  
 雪かづく冬薔薇の枝しなだれて薄紅の花色を失ふ  
 朝の日は低く昇りぬ消残りし瓦の雪のやがて流るる  
 前線の去りたる後のコンポスト重く凍りて上蓋あかず  
 堆肥塚の固く窪むはまつくろの野良のあの子の齧であるや  
 ひと目でも一段は更に編みゆかかんいつかは出来る紺のセーター

奥田陽子 降る 羊

いっせいに降りくる落葉の池にして鳥は岸辺に羽を閉じたり  
 眼のくらむ坂くだり来し右手には畑いちめんの黄の花咲かす  
 鳥威しの凧風に舞う所過ぎ鳴りいる音を背に遠ざかる  
 玄関のまことちいさき雪だるま子の歓声を身に負いて立つ  
 黒土に雪積もりたり冬もなおあらくさ猛く色を保ちて  
 雪に映す樹樹の影ありその上を駆けまわりいる子等の一心  
 昨日降りし雪さくさくと踏みてゆく歩める人に会わずゆく道

神田鈴子 訣れ 大

覚悟してゐるしとは言へど娘さんの電話に受話器を持つ手が震ふ  
 延命も葬儀もいらぬと言ふ友の遺志を黙してただ聞きをりぬ  
 ほんのりと紅をさされし友の顔ほほゑみ浮かへ人形のごとし  
 人形の作家なりし友の作 第一号を今もわが持つ  
 数知れぬ友手作りの小物あり思ひ出つきぬ品々溢る  
 怒りとふ言葉を知らず優しさに満ち満ちてゐし友の一生よ  
 晴れやかな着物姿に眠る友今こそ告げむ永久の訣れを

上林節江 会えぬ日日 海

お賽銭を奮発し申す孫の受験、姉の平安、わが呆け防止  
 感染症への予防措置として面会の禁止はすでに三ヶ月もぞ  
 あら、きれいと喜ぶ姉を見たかった伊勢エヒのお節寡黙に終わる  
 三階の東の角が姉の部屋夕やけ空に気づくだらうか  
 しあわせの認知症とは思われない人格消失までの長い混乱  
 返信を代わりに書きて出す賀状「呆けても姉は福の顔です」  
 腎臓を保護する薬をわれは飲む認知症にもあればいいのに

菊地栄子 枇杷の花 海

ある時は手持ち無沙汰に焼いているホットケーキの嵩厚きなり  
 寝覚めたる一瞬よぎりし黒き猫かく錯覚も忘れかねたり  
 朝毎に成長守るさやえんどう暮れゆく師走を丈伸びんとす  
 三丁の残る豆腐はいかにせんこの頃レトルト食品多し  
 決めたなら周知してくれ聞こえてはいるけど低きほそぼその声  
 老いの手は届きかねたる枇杷の花葉群の揺れは小鳥が潜む  
 ウオーキング歩き出したり眩しくも向こうの尾根に夕陽落ち行く

河野繁子 山里 雁

風の音せせらぎの音補聴器に捉え山里のうつつ流れる  
 朝ごとに霜まきつける霜柱誠実に生き寒に入る里  
 突風によるめきながらポストまで行きて帰りて一仕事終う  
 立山の谷なる氷河とけぬまま夏を過ぎしと居すわりて見る  
 日本にも氷河のあるを知らぬま九十二年生きてきたりし  
 ユトリロのビルの上なる時計の針は永久に動かずわが家の壁に  
 道の奥曲がりて見えぬそを見たき人の心を溜めている角

小林能子 昔話ではない 羊

焼け残りし我が家の裸電球の下で踊りたり「横浜に帰れた！」  
 敗戦も二部授業も苦とせぬ十歳のわれらの日々にはララ物資・ミルク  
 中学に進むわれらに進子先生「仲良くしつかり勉強して下さい」  
 日本の未来託すと先生は我らの前に頭を垂れて  
 「勝ち抜け我ら少国民」の傷痕を一身に創価学会に入りたまひぬ  
 昔話ではない「横浜大空襲」語り続けこし友も病む冬  
 昔むかし乙女が山百合を居留地に届けし道 吾らのリハビリの道

## 近藤芳仙

白き包

・信

## 佐藤道子

老い

・甲

彼岸より亡夫の送りし包み物 二十年目の今朝の正夢  
未だ生きて其処に居るかと案じしや 彼岸の夫ゆ荷を受くる夢  
暮れ早き夕への空を群れてとぶ高空の黒鳥音ひとつなし  
人人はコロナの前と話しをり友旅立つを人伝に聞く  
コーヒの豆挽きながら吾をまつと言ひたりし友 その友もなし  
とほくより手折り来たりし茶の花の五弁をあふるる雌蕊の黄色  
霜月の茶葉の緑をこぼるるや白き苔の円くふくらむ

## 坂上直美

令和八年新春

・天

年毎に減りゆく賀状それぞれ事情はあらん我は続けん  
あの友の今はいずこに何を為す恙あらずや賀状届かず  
君に供う小さき餅を二個重ね蜜柑を添えて初春を寿ぐ  
卓上の小さき蜜柑のオレンジの光を吾のともしびとす  
初春の光は小さき部屋に満つ窓より見ゆる街も穏しく  
ほの見ゆる天使の梯子降り来たれ翼を拡げ職さどめよ  
今年こそ今年こそ地に平和あれ穏しき光元日の朝

## 坂出裕子

花水木

・洛

もうすぐに春が来るよとささやいて潜ふくらむ花の水木の  
窓辺よりいつも見てゐる花水木ともに暮らせる家族のやうで  
障子開けガラス戸越しに庭を見る 見るとび仰ぐ花の水木を  
春が来て夏が来てまた秋が来ていつも新し伸びる枝葉の  
おはやうと兩戸を開けておやすみと兩戸を閉める花の水木に  
誰よりも私を知つてくれてゐるやうな気がする窓辺の木々が  
あたかな日々が続ける年の瀬の庭に拾へる山茶花の紅

この老犬の居らねば暮らせめと言ひし人この頃はねば氣に掛かり居り  
九十七歳朝の散歩に会ふ人とワンチャン達に命を貰ふ  
丹精の銅梅切りて待ちくる朝の散歩に通る庭先  
満開の銅梅正月香りたつ賜ひし人の想ひをこめて  
冬至過ぎ一月たつも明け遅し午前六時真夜の散歩  
暗がりてワンと一声飼主と駆け寄りて来る大きなバーデイ  
バーデイはぐいぐい押しつけて甘え来る私が少しよるめく程に

## 柴田登志恵

一・一七

・天

脱皮する習ひもたねど新たしき年にむかひて思ふことあり  
あいまいな胸うちの龍言語化す 言の葉の歌散りてしまへり  
空の星キラキラ光る 否否否 チクチク光る心が痛い  
カーテンの揺らぎのむかうに影のあり猫か悪魔かしかと解らぬ  
手袋の片方だけが玄関に朴の葉めきてひかる朝の日  
天国のBGMがモーツアルトばかりなりせばさぞや退屈  
桃太郎の納得いかぬ鬼退治 腹ペコ熊の柿食ふ話

## 関根榮子

九十二歳

・埼

遂に遂に命の終りきたるらし夫の両頬の温みうすれゆく  
ひと言も交わすことなき無念さよ眠りしままに夫の逝きたり  
病を得て二十年経つしかれども趣味を楽しみしことばかり浮く  
病重くなりていたるもひと言も辛さ苦しみ言わず逝きしよ  
泣くことは明日にせよと自らに言い聞かせつつ亡き夫に添う  
充分に生きたよとある日夫言ひし聞き流したる悔いの湧きくる  
いつ迄もみつめていたり戒名に「寿」入る九十二歳

関根和美

格闘

・埼

来年は卒寿迎うる叔母なるに麻痺増すその夫よく支えいき  
「まったくねえ顔パンに砂糖たっぷりなコーヒーなのよ」と夫を苦笑す  
食へざるはそのまま死へとつながらん老人医療の医師の言とぞ  
点滴にいまは生かされ横たわる叔父なりうっすらまなこを開く  
親族の見舞うけたる翌日に叔父は逝きたり入院十日  
家の内も門から庭のいすこにも手すりめぐらず格闘のあと  
束縛の老後を解かれ寂しくも叔母よゆたかに健やかにあれ

高尾恭子

一陽來復

・大

松林を吹く風ならめ初釜のたぎる湯の音さつさつとして  
寒椿わずかにほどけ秘め事のように一いしん会の濃茶をまわす  
たましいの欠片のごとく凜として黒羊羹のにぶき光沢なり  
薄日さす明障子の温もりに小さき宇宙の一碗を抱く  
手の内にすっぽりおさまる黒樂の加減乗除を敬さぬ世界  
今生の開をながれる燈明のひとすじ長く身のうち照らす  
抹茶プームの狂躁よそにくたびれた京の町屋の暖簾をくぐる

高津砂千子

飛び梅

・雫

わが先祖道真公のゆかりある太宰府に来ぬ年の終わりに  
年の瀬を太宰府に来ぬあたかき日和のもとを息子夫婦と  
代々の先祖の人らも踏み来し太宰府のつち吾も踏みしむる  
都よりあるじ偲びて来しといふ飛び梅あまたのつぼみを抱く  
飛び梅とう言葉ゆかしき梅の木をつぼみに頬をちかづけてゆく  
悠久のときおもいつつ太宰府の梅に近づくやさしくあれな  
いずれ咲く目を待たず去るわれらなり太宰府の梅永久に保てよ

滝田靖子

金星

・新

齒を削る音うるさくて夕飯の御数ちつとも思ひつかない  
ううああと小さな声か聞こえてくるストレッチ運動佳境になつて  
携へる武器は鍛へた身体だけ男らが立つ戦場は土俵  
金星を献上の土俵に深深と豊昇龍が頭を下げる  
星取りに一喜一憂して過すなるほどこれが推し活つてやつか  
成し遂げた満足を手に入れた気分今日の一首を手帳に記して  
真夜中を御遺体の帰つて来た家に今日も洗濯物干されてる

田土成彦

三時間

・宙

朝のゴミ出して定番卵掛けご飯金山寺味噌と梅干  
首筋の嗚呼冬と思ふ木枯らしに吹きだまりふる落葉掃き寄す  
歩数計今日の数字は四〇〇〇歩あるけたことをまあよしとする  
囲碁対局三時間ほどお互ひに世間話はなきまま過す  
街路灯そこここに点き星空を見ることもなし郊外なれど  
フライパンの廃油吸ひ取るぼろ布は十年ほど着たTシャツの袖  
創作は虚実皮膜の間にあるどちらかと云へば虚にひかれつつ

田土才恵

湖西線

・宙

予想逸れ朝雲かかる山の端に思いがけなし朝日がひかる  
湖西線トンネル幾つ抜けし先不意に輝く比良の雪の嶺  
曇り空一転朝の陽射しくれば期待膨らむ湖西冬旅  
隠里一日一本のバスのみの岬の波のいと静かなり  
幾重にも湖岸をめぐる永原の開けし土地のなんと暗れやか  
ふゆ来ればたちまち雪に覆われる永原を愛した白洲正子は  
流されて行くかにみえし鳩の群れ湖の水面にひたり止まる

玉井綾子

卒業アルバム

・羊

永塚節子

丙午

・銀

休むのもありと氣付きて休めた子 最初の不登校の子に謝する  
降りる駅降りたい駅が見つからず不登校の子は電車に乗れぬ  
江戸川区小中学生一割が不登校、ケーキ十等分する  
子が登校していた頃の筆箱の今氣付く破壊していた中身  
名前すら載せぬ選択肢もありて不登校の子の卒業アルバム  
木枯らしの中すれ違ふ男の子二人の「さみしい」が落ち葉巻き上ぐ  
通信制高校なべて学力の試験なく一月に梅香る

中島央子

正月

・森

境内を埋めて広き菊花展季おだやかな一隅の秋  
葉を落とし尽くし銀杏の並木道師走の風は遠慮がちなる  
雨傘を杖がはりに一歩づつ弟夫婦の墓所へと歩む  
小春日を籠もるに馴れて陽に輝れる紅葉狩りはテレビにて足る  
不意に来し一面の雪窓越しに見てゐる正月の夜  
追ふ者と追はるる者の一騎打ち箱根の山のドンデン返し  
来る年もどうやら生きてゐるつもり曾孫に背負はせむ一升の餅

永田進

一〇二六年初詣

・山

焚火にして神といふなり石上神宮鶏冠立派な鶏を見つめつ  
あれが頭領吾子の指さす鶏冠には威厳のありぬ石上神宮に  
門前に列なす初詣道真に縁という菅原天満宮  
秋篠寺大元帥明王堂に去年の輪島の地震に遭いたり  
秋篠寺苦むす庭の片隅に木の葉散り敷く夕光のなか  
灯籠の並ぶ参道苔生して春日大社は夕光のなか  
おみくじの歌はいずれも明治帝造り給える人生訓なり

丙午の年は幸せ運ぶという馬の土鈴に耳傾ける  
大過なく歩み来たりて七度目の午年迎うを幸となさん  
コントロールの時には弛む耳元に成分表のならぬという声  
寒風をものともなはず道の辺に名もなく咲ける花のごとしと  
その心問う人あらば道の辺に名もなく咲ける花のごとしと  
クレヨンにふた色でよし澄みわたる真冬の空と素心臘梅  
ストレスのひとつひとつを消しながら私が私に帰る時間帯

仲西正子

絶叫ライブ

・沖

十年はあせぬとぞバラのプリザーブド胸に抱かな喜寿の花かこ  
賜わりしプリザーブドに十年を重ねて先ずは背すじ伸ばせり  
喜寿祝いプリザーブドのバラかこにすこやかなれと息を吹き込む  
いつの間に覚えていてか少年は百折不撓とさりと書けり  
寺山と中也と死者の魂を呼び福島泰樹の絶叫ライブ  
ステージの福島泰樹の太き声ま正面から命をたたく  
まばたかず絶叫ライブをききし夜の胸の熱りや曼荼羅を出す

中村博子

二百三十段

・澁

医者からは禁止されにし石段を見上げてのぼる正月四日  
石段を二百三十昇りきる明治天皇陛下の御陵  
大学生らしき男の子や歳問われ八十五歳にビックリされる  
さわやかな御陵の前の広庭に飛行機雲のふた本伸びゆく  
あら玉の年の御陵の樹々の道玉砂利の音聞きつつ帰る  
名を知らぬもろ鳥の声高く低くひびける御陵の砂利の参道  
汗はめる年の初めの散歩終えスマホは六千九百刻む



## 藤森巳行

働いて

・銀

働いてまた働いて働けどそれでも民の暮らし貧しき  
長時間働くことは悪と言ふ時代の流れは価値観変へる  
働いて高度成長支へたる我らは仕事一筋猛烈社員  
懸命に働くことは美德なり教へ込まれた価値観変はらず  
今もまだ働くことが好きなのでテレビ見るより家の前掃く  
水河期は働き口なく能力のある人材も非正規となる  
働いて我ら税金納めたりされど国の負債一千兆円也

## 本元由美子

追儼

・岡

野に出てて摘みたる若菜の入りたる粥を煮をれば母の匂ひたつ  
女々しいと豆々しいがリンクして私の内で好きにはなれぬ  
父が鬼幼二人は豆を撒く小さな手から豆の零れ落つ  
「鬼は外」赤鬼青鬼の逃げまどふをさなふたりの笑顔はじけて  
父も母も家族五人が鬼の面をさなと祖母が昼中作りしを  
厨には夕餈の膳の整ひて一升料に煎り豆かををる  
今はもう家内に鬼のゐなくなり己の鬼を払ひてもらふ

## 牧雄彦

草

・大

大川を聞きしことなし解やかなたねちやんす一つと消えてしまひぬ  
をみなごがそのまま齡を重ねゆくそんな人なり小林たね子さん  
野に咲ける草かコスモス思はせて静かに生きたね子さん 嗚呼  
中村哲のあとを継ぎたる村上優に英語を教へき若かりしころ  
新聞のラオスの記事の切り抜きをしばしば送り給ひしことも  
穏やかな旅立ちと聞き人柄を偲びてあなたの後手を見つ  
歌会の席にあなたの影はなし静かに告げむさやうならたねちやん

## 松本多摩子

古切手

・桜

若き日に亡夫収集の古切手百十四分何枚も貼る  
認知症の夫を残して遊きし友一年経たずに喪中のハガキ  
雪抱く美しき富士御殿場の孫のラインが瞬時に届く  
「会いたいね」書きし賀状の三十年会わぬままなりそれだけのこと  
娘の氣持帰省のみやげと隣人に母をたのむと届けて帰る  
脚力の落ちし散歩にからからと落葉がわれを追い越してゆく  
年末の帰省はわれの困り事いくつも解決して帰る息子よ

## 三浦好博

青海波

・銚

青海波の海の初日を拜みきて屠蘇を酌むなりその舞ひ見つつ  
初夢に一富士なりと喜べど妻と出会ひしああ富士銀行  
親達の四人の遺影に若水を汲みて心経あげる元旦  
狭窄症回復試す歩きにて海見ゆる公園まで三キロ  
丘に見る青く弧を描く美しき新年の地球戦争して  
我もまた海を見て立つ涙痕碑三富朽葉今井白楊  
一國の大統領の拉致問題彼を支持するかどうかではない

## 三木まり

瞬

・昂

梁わたるイタチの腹は艶やかに嬬へ帰るか屋根根裏へするり  
冬の朝一筋の蜘蛛の糸ひかる寒い部屋の壁から壁へと  
白鳥の羽ばたき激しくいま空へ境界線を超える瞬間  
道半ば力尽きた彼の人に銀の墓碑を 宙の星座へ  
調律が少し狂ったピアノなら音の舟に揺られて眠る  
曖昧はいまのまま置いておく決めないという心羽ばたく  
振り返りまた仰ぎ見る冬空よ今が一番いちばん幸せ

## 宮本 靖彦

迎春花

・凌

元旦ゆ日よりつづきの我が庭に水欲しと叫ぶ木々の声聞く  
寒椿冬荒涼の庭飾る慰め花の品種増やさむ

厄神さん荒神さんへの初詣で息子に引つ張られ無事に了へたり  
春の日と紛ふ陽光かじかみし手足のぼして庭作業する

溜めおきし食物残も庭に埋め今年もトマト近くに配らむ  
紹興ゆ移しし迎春花四十歳庭の細道白花が飾る

十日過ぎいつもの日々に街戻り妻に言はれて買物に行く

## 三好 聖三

水

・伊

畑への乾いた道を下りたり誰にも逢わず挨拶もせず

土返しすればたちまち寄ってくる百舌は虫らを啄むらしき

ほつほつとひらける梅の花のした緞の柄傘へ寄りくる百舌は

雨の無き日水を撒きに行くにんにくキャベツたまねぎのもと

この国の首相がひどく燥きたる空母が渡る薄霧のなか

使わなくなつて久しい言の葉に沢庵漬けのおこうがある

ひさかたに寺山修司の声を聴く日曜の朝飯を食いつつ

## 御代田 澄江

夢のなか

・茨

久々に父の夢見ぬ後姿の畑打つ姿父の忌近し

若き日の御洒落の父も床屋好き泊まれば娘の家近き床屋と懇意に

夏の暑さに枯れゆきたりしほととぎす淡き紫の命惜しみぬ

弟住む北茨城の「お船祭」ユネスコ文化遺産と決まるを喜ぶ

所要の帰路偶々遭遇せるお船祭陸行く船を担ぎ揺らしぬ

のど自慢九十翁「毎日何を」「早寝早起き」素晴らしとアナウンサー氏

節分に生まれたから節子なのと毎週来るヘルパー明るく言ひぬ

もとむらしげと

巨樹

・そ

仰ぎみる八幡の樟のまばらなる枝を透かして宵空のみゆ  
その昔和氣消麻呂が杖を立てし所より芽の出でしと誌す

伐られたる枝の痕跡まざまざと千五百年を生きたる証  
高きまで苔に覆われし幹のこぶ通かなる時を刻みたる痕

八畳の虚もつ巨木の下に立てば少年の我よみがえり来る  
千五百年の樟の巨木の瘤に乗り遊びたる日々こそわが昭和

境内の広きを分けて落葉掃きし友らいつしか散り散りとなり

桃原 佳子

地中海

・沖

山茶花も縮まるような朝の冷え素手で集むるその花片を

冬陽さす石段のぼる老いの手に今宵の食材ずしりと重い

戴きしスイートスプリングパール柑冬はよきかなオレンジの色

今年こそ今年こそはと思いきて変わればえせぬ今年の抱負

わが力わが誇りなる「地中海」愛し学びて二十六年過ぐ

さらさらと風花青き空を舞う触ればふいと消ゆるはかなさ

きな臭き煙あちこち立ち昇る未だに止まぬ戦火の狼煙

山野 幸司

薪

・沖

薪を割る行為に自分取り戻す大地に足をふんばり構え

誠実に生きたしこの地故里に黒き魔の手番電所建つと

宅地横蓄電所建つ計画にただオロオロと反旗を掲ぐ

冬の陽を一杯に浴び振り下ろす斧に真の心をたくす

すがすがし畑に草刈る我がそばに近寄り難き冬過ぎんとす

梅干を舌にころがし流し込む朝の始まり素直に続く

悪夢かと善き夢か等考えつ妻の寝顔に心休まる

## 山下雅子 余韻

冠雪のいよよ豊けき今朝の富士大寒の空に泰然とあり  
木々ゆらす風に黄葉かがよいて見下ろす視野に人は小さし  
兩上がりゆるる黄葉のしつとりと艶めくいのちの揺蕩う朝なり  
踏切りに鳴り出す鐘の端々と昭和の余韻うっとり聞けり  
転ぶまい慎重に動くわれなれど娘の視線にはおぼつかなしと  
晩年の尊き体力守りつつゆっくり静かに午年生きん  
語呂のよきこのはたらいてはたらいては女性首相のメリットならん

## 山本 孟 老眼進む

十二月日暮れ近づく申の刻読む字薄れて老いの眼かすむ  
大晦日喧嘩残し日の沈む人工灯はしぶとくかがやく  
元日の入り日に六甲黒黒と初乗り機影は雲へ消えゆく  
知らぬ間に老いの先端へ遡る吾を地球は日夜狂ふことなし  
五万米啣む歯を保つ身のくちびるに短歌湧く蹄をなほざりにせず  
老眼の進みて近くに拡大鏡三個用意しそこここに置く  
冬こもり話す人なく短歌読めば世間とつながり旅の心地す

## 養学登志子 蛸

蛸の旨さ誰もが知ってしまったから奪い合う事はげしくなりぬ  
アフリカの蛸は日本の蛸だった旨さ教えしもわれらだったか  
アフリカの蛸は世界の蛸となる異常発生海あるを知るや  
めつぶれば親しきひとらそばに寄りそとみひらけば影さえなきは  
目つぶればこの身のそばに寄るひとよ永久に目瞑るときのかづく  
一年後の法事の都合問われしも「ワタシイナイヨ」冗談めきしか  
よこさまに寄り来し鶏は肩にのりあのねあのねとわが髪毛づくろう

## 横田敏子 頑張っている

頑張れとは言えぬ雪国頑張って、頑張っている 雪降り止まず  
落ち込みし気持が徐々に溶けてゆく今朝の明るきブルーの空へ  
立春を過ぎし家庭のひとつところ水仙の芽のきゅんと伸びおり  
チョコレートひと口パキッとカジリたり疲れし脳の休憩時間  
五七五続く下句が出てこない 林檎を齧るサクサクかじる  
夕飯の支度の前に柿ピーの袋を開けて食べてしまつた  
日々続く暗きニュースはお預けに オリンピックが今開幕す

## 久我田鶴子 景霞

かつての名ちひさく書き添へ賀状来る日本に暮らす時を刻みて  
なつかしき名なり景霞 四つめの名を得て二児を育てあげしも  
中国に残されし子の娘とし日本に経たる景霞の歳月  
日本に来て間もなき頃の十代のはにかむやうな笑顔わすれず  
手づくりの餃子の皮のやはらかくあまく肉汁つつまてゐたり  
父母や兄たちいかにと思へども訊くこともなく過ぎてきたるを  
景霞いまいくつになるや なつかしく振り返るゆとり持ちあゐるらしき



## 私の内部に巨口のやうな

— 香川進の口語自由律 —

私の内部に巨口のやうなエヤーポケットが出来た日の明る  
いあかるい七月のそら

香川進「太陽のある風景」(1941年)

二〇二六年一月八日、砂子屋書房のホームページから「日々  
のクオリア」を開いてみたら、飛びこんで来たのはこの歌。香  
川進の口語自由律の歌だった。

取り上げているのは、嶋栗太郎(一九八八年、石巻市生まれ。  
「未来」所属。歌集に『羽と風鈴』)である。

嶋は、はじめに「定型ではない、自由律短歌の歌だ。香川の  
代表歌と合わせて読んだ方が良いだろう。」として、「花もてる  
夏樹の上をああ『時』がじいんじいんと過ぎてゆくなり」を挙  
げ、このように書いています。

名歌である。一生に一度でいいからこんな歌を詠みたい  
なあと思うし、一度しか詠んではいけないタイプの歌だと思  
う。文語定型の歌だが「ああ『時』がじいんじいんと」  
は口語的で、「明るいあかるい」の空気を引き継いでい  
る感じがする。香川の歌には口語自由律をルーツにしたか  
らりとした空気感のある歌がときおり現れる。時が過ぎ

ると言うところか寂しい感じがするものだけど、「じいん  
じいん」はなんとなく楽しげだ。

名歌としながら、それが一生に「一度しか詠んではいけない  
タイプの歌だ」と言うのはよく分からないが、文語定型だが口  
語的というのはその通りだと思う。

嶋はそこから「自由律」について考察し、

「自由律」が破調と大きく異なるのは、定型のリズムの破  
壊であって、もっとわかりやすい方法が「句の単位をはっ  
きり分けたい」だと思う。一略—自由律を立たせるには、  
定型を強く意識しながら散文との間を網渡りしていくバラ  
ンス感覚が必要になる。

と述べている。そして、この掲出歌については、「句を細かく  
分けて勢いよく最後まで読んだ方が気持ち良い」とし、「ど  
こまでも広がるような開放的な感覚」「カオスを楽しむような  
前向きで希望に満ちた屈託のない歌」とも述べる。そして、最  
後に注目しているのは、「戦前の歌」であることだ。さらに、  
「今読むとどこか傍さも感じさせる。」としている。

歌集に当たってみると、この歌は「志賀の歌」(23首)の中  
にある。おそらくは昭和十二年作。香川は、二十七、八歳。す  
ぐ前には「僕の胸にボールのやうにきみが飛びこんで来た日の  
からりと暗れたそらの青」があった。

〔久我田鶴子・記〕

## 今日の二人

### 思い出は宝物

遠藤 弘子

水郷の橋に囲まれ生れし吾人生の橋もあまた渡りこし  
 元旦に琴・ヴィブラフォンの「春の海」演奏の娘に拍手喝采  
 曙の薄墨色の雲の背の明らみ今日も元気に生きむ  
 そよそよと公孫樹の若葉に初夏の風マスクを外し深く息つく  
 公園の水の噴き出す広場にはびしょ濡れの子の歓声響く  
 杉木立の飯高壇林うっそうと友と散策心晴れ晴れ  
 波のごと青き芒の風にゆれ白銀に変わる季を待ちわぶ  
 満点の星に父母見つけたり笑顔の見守り心に留めぬ  
 湯けむりと硫黄の香りに包まれて心ほぐるる草津の朝あした  
 入院の夫の付き添い交代す子らの助けのありがたきかな  
 初めての一人暮らしの娘を残し帰路につく吾の涙とめどなく  
 妻子連れ家に戻りし子に感謝初孫抱きて笑顔の日々よ  
 嫁ぎゆく娘にウェルカムドールをと一針一針心をこめぬ

### 短歌と私

私が短歌と付き合い始めたのは、九年前。元上司に誘われ、しぶしぶ入会したのが東庄町短歌会である。それまで短歌は縁遠い存在であった。しかし、振り返れば身近なところに縁はあった。それは昨年他界した義母で、東庄町短歌会の会員でもあり、他にも短歌を投稿して勉強していた。十年前、義母の米寿の祝いに、それまでの短歌をまとめて手作りの歌集を贈り、喜んでもらったのが昨日のことのようである。

私が入会した頃は大先輩方が多く、たくさんのお話を聞いて勉強することができた。今は縁あって三浦好博先生に出会い、大変丁寧に指導を頂きながら勉強中である。また、「地中海」にも誘って頂き入会したばかり。なのにこのような機会を頂き、驚きと喜びと不安という複雑な気持ちだったが、勉強のよい機会と思いきや楽しかった。今では短歌会で知り合えた仲間がかげがえのない友となり、勉強会を続けている。様々な思いを三十一文字にこめて表現するのは難しく、苦しい時も多いけれど、私流に、日記風でも、とにかく作ってみようと思うこの頃である。この先の人生の楽しみの一つとなるように精進しつつ、作歌を楽しんでいきたい。宜しくお願いします。